硯友社と文士劇

江見水蔭

青空文庫

演劇改良の声が漸く高まりかけた明治二十三年の正月、硯友社は、初めて文士劇を実演した。それまでに各所で素人芝居が開演されぬでは無かつたが、たとへそれは遊戯的に終つたとしても、兎に角文士が揃つて新作の脚本を上演したといふ事は、当時に於て一大驚異で有つたのだ。『今の俳優には、役に就ての心理解剖が出来ない。我々は芸が下手でも、それが出来る。今に教育有る者が続々劇界に投じるだらう、我等は其先駆者だ。』

そんな抱負を口にはしたが、要するに内実は、芝居が演じて見たかつたので。けれども昔から型の有る物をやつては、到底団十郎、菊五郎には及ばないから、新作物で競争しやうといふ鼻息。それで、先づ初に紅葉が提案したのが『八犬伝』で、常磐津の富山（とやま）の段を、馬琴の名文を多く取入れて、別に又新らしく書けといふので有つた。

今のやうに現代語に直すといふ智慧も勇気も出ず、いくら新らしく書いても、馬琴の名文は動かしやうが無いので有つたが、扨て脚本が出来上つて見ると、伏姫の小波は納まつたが（大助は自分）犬の八ツ房（ふさ）に成る思案が納まらない。人を馬鹿にしてゐる。俺を犬にするとは怪しからん。好し、それなら俺の方にも考へがある。犬を飽くまで写実で行つて、伏姫の膝に鼻面を擦りつけたり、チン〳〵もすれば、お預けもする、といふ大変物騒な事に成つて来た。

一方には又、石橋の八ツ房も好いが、あんな大きな頭の犬が。何国（どこ）に有るといふ異論も出て、到頭『八犬伝』はお蔵（くら）と成つた。

それで別に自分の新作史劇『増補太平記』大塔宮十津川落に片岡八郎討死といふのを、一番目として新作。二番目としては、広津柳浪の立案で『積怨恨切子燈籠』といふのを、自分が四幕に書き卸した。これは九州の豪族蒲地左衛門を、龍造寺山城守が、能興行に呼んで殺害する。その遺子宗虎丸が親の敵を討つといふ筋。大切は『花競八才子』五人男に三人多いのが、銘々自作のツラネで文学上の気焔を吐かうといふ趣向。

紅葉が万事の総頭取で、なるべく、金の掛らないやうにしやう、鬘を全部借りると高いから、端役は間に合はせに大森鬘を買ひ込む事にしやうと、紅葉自身がワザ〳〵買ひ出しに行つた処が、例の凝り性と来てゐるので、気に入つたのが見当らなかつた。それで大森山谷の製造元まで行つて、十数種の鬘（張りボテに棕梠の皮を染めて、髪と見せたもの）を註文して、帰つて来て、今度は自分に向つて、金は払つてあるから、取りに行つてくれといふので有つた。

それが二十二年の年末で、自分は杉浦先生の塾にゐて、原稿は書いても売れるアテの無かつた時代で、窮乏も甚だしい間であり、甚だ迷惑はしたけれど、已むを得ず旧地の新橋駅から、汽車で大森に行き、そこから二人乗の俥を傭つて、山谷まで出掛け、鬘製造元を訪ねた処が『何か、入れ物を持つて来ましたか』といふ。『イヤ、何んにも』と答へたので、『それでは之を貸して上げませう。ナニお返しに成らなくても宜しい』といふので、大きな破れ葛籠を出して呉れた。

この大葛籠と相乗りで大森まで帰つて、それから汽車を新橋で下りてから、又大葛籠と相乗

りで、飯田町（今の暁星学校の裏手）の石橋の邸内まで持込む事に成つてゐたのだが、九段坂の上まで乗るには車賃が足らなかつた。それで仕方なく坂下で俥を下りて、大葛籠を肩に担いで、坂の中途まで登り出した。

雨降り挙句なので、自分は高足駄を穿いてゐた為に、歩き難くは有り、荷は重し、困り切つてゐる間に、からげてゐた縄が切れて、葛籠を肩から取落した。

すると中から、侍かつら、坊主かつら、娘かつら、老人かつら、大福助のかつらまで転げ出したので、通行人はビツクリするやら、笑ふやらで、自分は顔を真赤にしたので有つた。

本読みがすみ、役割が定まつた。其主なるものは、一番目では、大塔宮（眉山）玉置半九郎（小波）野長瀬六郎（水蔭）同七郎（虚心）片岡八郎（思案）赤松則祐（漁山）村上義光（柳蔭）芋瀬勇七（露紫）

二番目では、蒲地左衛門（水蔭）龍造寺山城守（漁山）家臣某（九華）同（紅葉）同（眉山）宗虎丸（小波）清三郎（虚心）庄屋（紅葉）下男（思案）村の娘（錦簑）同（露紫）其他踊り子楽屋総出。

処で、此の稽古は、石橋の親父の別荘が根岸に在つて、そこには石橋の姉さんが北海道から帰京して、仮りに住つてゐる他に、誰も煙たい人はゐないからといふので、そこへ毎日通ふ事にした。

立廻りの稽古には、お定まりの箒やハタキ、それに踏台を合引代りに遣ひなどした。毎日バ

タ〳〵やるので、近所の人々は『何んといふ好い月日の下に、おうまれなさつた方達でせう。この大晦日近くに成つて、お芝居のお稽古とは、お羨ましい事で』とイヤミまで云つたさうだ。

この立廻りに就て、どうも本職の殺陣師が無いとイケないと成つて、柳浪の友人二宮某の知つてゐる坂東甚五郎（後に市川九字蔵）といふのを頼んで来た。

これから、立廻りの他に盆踊りの手まで皆教はつたが、甚五郎は急に団十郎一座に加入して、京都へ行くといふので、其代りに明日から義弟の七五三太といふのを寄越しますと云つて、暇乞ひをして先きへ出た。

それは暗い夜で、今のやうに電燈なんか何処にも未だ無かつた。懸値無しの真の闇で有つた。庭の踏石を伝つて真直ぐに行き、それから左へ曲つて門へ出るのであるが、それを甚五郎先生、真直ぐに何処までも行つたので、忽ち池の中へ飛び込んだ。気の毒千万にも寒中濡れ鼠で、ブル〳〵ふるへながら戻つて来たので、見送らなかつた我々は恐縮千万。

石橋の姉さんが赤ン坊を背負ふねんねこを借りて、それを着せて帰へらしたが、その濡れた衣類を帯で縛つて、片手にブラ提げ、ポタ〳〵雫を垂らしながら、悄然として去つた甚五郎の姿を思ひ出すと、今でも気の毒で耐えられないのだ。（此の時の赤ン坊が確か今の文学博士石橋智信の筈だ）

これと同じ失策を演じたのは紅葉で、その頃富士見町にゐた武内桂舟の家で、夜遅くまで背景の製造や『八才子』に着る衣裳の製作の（白金巾の単衣に桂舟が肩抜き風に桜の大木と鳥の

飛ぶのとを書き、背中に大きく月を出し、金紙で風といふ字を切抜いて、それを胸の辺に張りつけ、つまり花鳥風月といふ意匠。裾には朱で名家の印譜を画き、前の方に自分々々の遊印を出すので有つた）手伝ひをして、夜更けての帰りがけに、今の陸軍々医学校の前まで来た時に、あまりに懸命で、セリフの暗誦をしてゐた為に、少し折曲つてゐる道を忘れて、真直ぐに行つたので、忽ち溝の中へおツこちて、向臑をスリ向いたので有つた。

いよ〳〵一月五日の夕方から、小石川の佐藤家で開演した。舞台は新築された。

それからの失策は百出で、巧まざる滑稽は八笑人以上。

一番目で、先づ冒頭に思案の片岡八郎が出て、演説口調で述懐のセリフがあり。十津川の関所にと掛ると、番兵二人（小波、露紫）が出て、問答の末に大立廻りに成るので有つたが、これが今の剣劇の元祖で、非常に激烈な切合ひで有つた。（演劇改良の急先鋒たる依田学海翁の如きは、非常に喝采して『読売』で激賞した。）

しかし之は種を明かして見ると、石橋は近視眼で、それが眼鏡無しで登場するのだから、何処を斬られるか分らない。こちらは決死の覚悟でやらなければ助かるまいといふ、小波と露紫との打合せなので、その結果が、其頃には珍らしい真剣勝敗に見えたので有つた。

それから大薩摩が有つて、浅黄幕を切つて落すと、十津川山中の背景。此所に山伏姿の宮（眉山）同じ山伏姿の二人の臣下（漁山、柳蔭）が、金剛杖にもたれて、うたゝ寝をしてゐるといふ場面。

諸事浅黄幕ばかりで、簡単に片づけられると見縊つてゐた見物は（三百余名）未だ其奥にも本式の舞台飾りがして有つたので、一時にワツと来た。

眉山の宮は実に美しく、故人田之助といふ衆評で有つた。

そこへ戦死した片岡の亡霊がドロ〳〵で岩間から出て、三人の眠りの中に、夢枕として前途の活路を教へるといふ筋。

大ドロ〳〵で幽霊が出るに就て、お定まりのカケ焔焼（えんせう）で烟（けむり）を出すなんか古い、化学作用で奇抜な煙を出す。其朦朧たる煙の中から、甲冑姿の幽霊が現はれる処に新味が有るといふ事で、その煙の役を引受けたのが、安川政次郎といふ薬剤師（翁屋といふ化粧品店を神田に出して、一時硯友社の倶楽部のやうに成つてゐた——この安川の親戚が田中煙亭）

その薬品は何んで有つたか知らぬが、仕掛は煙草盆に火を入れて置いて、それから新聞紙で小煙突をこしらへて冠せ、キツカケを待つて火の中へ薬品を落すと、パツと煙が立つといふ段取で有つた。

大薩摩が切れて、大ドロ〳〵を打込んで、いよ〳〵片岡の亡霊が出ると成つて、翁屋主人が薬品を投込むと、煙の他（ほか）にパツと火を発して、イキナリ新聞紙の小煙突に燃えついた。

それをキツカケに煙の中に出る筈の思案は、忽ち『キヤツ』と叫んで、飛上り『熱い〳〵』と云ひ出した。幽霊が足を火傷（やけど）したのは前代未聞の珍談で有つた。

それから幽霊の物語がある。（無言劇）それを宮が夢幻の裡に聴いて、宮のセリフとして前

途の暗示を語る。此辺はトン〳〵と巧く行つて、扨て片岡の亡霊に導かれた事によつて、野長瀬兄弟が、花道から駈付けて来るのであるが、自分の兄が抜刀で先に立ち、後から虚心が（今の法学博士岡田朝太郎）槍を持つて駈けて出て来る。花道好き処で、互ひに顔を見合せ、うなづき合つて、本舞台に掛るの段取だが、出が来たので自分は勢ひ込んで、花道へ飛出して、好き処で立留つて、振向いて見ると、後につゞいてゐる筈の虚心がゐない。これには面食つて、如何して好いか茫然としてゐると、ヤツとの事で虚心が出て来た。

どうして遅れたかと、後で聴いて見ると、虚心も同じく勢ひ込んで飛出さうとして、揚幕へ槍の先を突ツ込んで了つたので、それを抜かうとしてもナカ〳〵抜けなかつた。それで遅れたといふので有つた。

扨て段々運んで、最後には渡りゼリフと成り『イデヤ祝して出立なさん』と五人引張りの見得。それを木の頭で幕と成る手筈なのだが、その幕が一向引かれなかつた。

五人とも眼を白黒さしてゐる間に、ヤツとの事で兎に角幕は引き付けられた。これは俳優の役割は極つてゐたが、幕を引く者の割当てがしてなかつたので、イクラ木を打つても、誰も幕を顧みない。それを小波が心づいて、あわてゝ幕を引いたのは好いが、余りに狼狽したので、舞台から見物席へ転げ落ちた。けれども落ちたまゝ如何やら幕は引き終つたので有つた。

二番目では、序幕が松破目の能舞台で、此所に招待された蒲地左衛門（水蔭）が地頭といふ格で坐つてゐる。それに龍造寺（漁山）其他の諸士が、いづれも袴で並んでゐる前で、九華が

家臣某に扮して『屋嶋』の仕舞を見せるので有つた。

九華は斯道では大分苦労をしてゐるので、本行と来ては普通の俳優以上。地謡の方へは、佐藤黄鶴が廻つて、松破目の陰からやる筈の処、観世清廉が見物に来てゐて『私もスケませう。』といふ事。美声家としては古今絶無といふ評判。その観世の家元が芝居の地に廻はるなんて、昔なら大問題を惹起するので有つたが、然ういふ具合で、気軽に突き合つてくれたので、能の仕舞は大成功。

最後に九華が突然自分の蒲地に斬付ける。自分は肩先をやられて苦しむ処で幕。此所までは先づ無事で有つた。

扨て二幕目に成つて、蒲地の臣（柳蔭）を龍造寺の臣二人で（紅葉、眉山）斬殺さうとして、大立廻りと成るのだが、紅葉が斯うした軽い役に廻つたのは——素人芝居では、成るべく軽い役で浚つて行くに限るといふ、先づ通な遣り口を学んだので有つた。

これが片づくと本釣鐘を打込んで、藪畳を押破つて、捕手に手を取られながら、手負の蒲地が、血刀提げて出て来るといふ、自分としての儲け場所だ。

そこへ家臣清三郎（虚心）が駈付けて来るので、それに後事を託し、蒲地は切腹して落入るといふ愁嘆場。笛入りの合方で、好い気持に芝居をしてゐる間に、フト自分は切られた肩先に心づいた。

白無垢に血綿を縫ひつけて有つたのだが、それが下過ぎてゐるので、いつしかに血が胸の処

に下つてゐた。これはイカンと早速その血綿を、肩の方へ掛けたのを、見物に見つけられて、ドツと悪落が来て、さん／〃＼の失敗。

三幕目は清三郎の住家で、百姓に身をやつしてゐる蒲地の一子の宗虎丸を、妹お徳と変装さして、隠くしてゐる処。お徳が小波で、清三郎が虚心。妹の方がノツポーで、兄の方がチンチクリン。これでは疑はれるのが最もだが、芝居のお蔭で露顕にも及ばず。

幕明きには下男がゐる。これが思案の役目だが、その下男の鬘が如何しても納まらない。当人は納まつても頭が人並脱れの大形なので、鬘の方が納まらなかつた。

一番目の時は、片岡八郎で、揉烏帽子で有つたから、鬘は冠らなかつたのだ。二番目の幕が開くと成つてから、初めて今更の如く思案の大頭を驚嘆しても、どうにも追ひつき様が無いので有つた。

『何んでも好いから冠つて了へ。』

『冠る気でも冠れないんだよ。』

痛いといふのを無理に冠らせ様とすると、床山が飛んで来て『鬘の地金が曲つては困ります。』といふ騒ぎ。

それなら幸ひの大森鬘、これならこはれても好からうといふので、寄つて集つて押冠せたが、その為に幕明きが十分ばかり延びたのは、見物こそ好い災難。

庄屋の紅葉が『今夜の盆踊には領主の龍造寺殿が、忍び姿で見物に来られて、気に入つた娘

が有つたら寵妾（おめかけ）にせられるとやら。』と筋を売つて行く。

下男の思案は『此事を主人に知らせよう。』と奥に入るべく、中央の暖簾口（のれんぐち）に掛つたので、此時後見（こうけん）の役に廻つてゐた自分は、ビツクリした。

何故といふに、暖簾口も、暖簾も、皆書割りなので、そこから出入りは無い事に成つてゐるのだが、近眼の思案はそれが分らず。平気で進んで、頭で暖簾を掻き分け様としたが、それは絵だから忽ちコツン。大頭に無理に嵌めた大森鬘は、アツといふ間に転げ落ちた。

鯨波（とき）の声を揚げて見物は喜んだ。

小波の娘役は美しかつたが、何分手先を袖口の中に殺す事を知らない為、ニユツと両手を出してゐて、あまり好い格好ではなかつたが、さほどの悪落（わるおち）も来ず。盆踊の人寄せの太鼓の音を聞いて、キツと成り。

『アリヤあれ踊の、人寄せなるか。』と男子にかへつて立上り。

『処もちやうど与加（よか）の馬場。父の敵（かたき）を。』といふを、清三郎（虚心）が受けて「打つ、太鼓」と極まる。『イデヤ踊へ。』二人一緒に『急ぎ申さむ。』そんな風で幕は、大喝采。

四幕目は楽屋総出で盆踊。チンチン、テンレン、トツチンシヤン、と大分練習は積んでゐた。自分は狂言方兼後見で忙しかつたが、矢張り踊り子の中に入つて踊つてゐた。

先頭は庄屋の紅葉、それから下男の思案、眉山、九華、錦蓑、露紫、虚心、柳蔭、いづれも夢中で踊り抜いた。

処が、此踊の中途で、例の薬剤師が、其頃は珍らしかつた電気花火を燃やして、電光を見せる。それをキツカケに夕立の鳴物といふ約束で有つたのだ。

薬剤師の翁屋は又『僕には、いつ燃して好いか分らないから、好い加減の処で声を掛けてくれ。』と自分に依頼した。

それで自分は、もう好い頃だと、藪畳の中に隠れてゐる翁屋に向つて、いくら合図をしても少しも聞えない。それも其筈で、翁屋はツンボなので有つた。

踊り子の方は、好い心持に成つて、いつまでも〳〵踊つてゐる。紅葉それに気が着いて。『夕立だい夕立だい。』と呼はりながら、先きに立つて下手へ逃げ込んだので、ヤツと盆踊は片づいた。

此所へ龍造寺山城守（漁山）が深編笠で出来り。『俄かの雨に雨具もなく。』とか何んとか独白がある。そこへ娘姿の宗虎丸（小波）が手拭を冠つて出来り、トゞ娘姿を引抜くと、鎖り帷衣に白装束、親の敵討の立廻りよろしく、一刀に龍造寺を切付けると、血だらけに成つて大苦しみをするといふ処。

漁山は此所を自己の見せ場だとして、グツと足を割つて、手では、空（くう）をつかみ出したが、其の時あまりに前を拡げ過ぎたので、異な物が見え出したとやらで、見物はドツと笑ひ出した。

小波は之に気が着いて、急いで漁山を打倒さうとしたが、漁山は夢中で『未だ〳〵。』と云つてナカナカ死なぬ。それを清三郎の虚心が加勢して、二人でヤツと倒したのだが、後で漁山

こぼすまい事か。『医学上から見た死に方を研究して実地に見せてゐる処を、あんなに早く殺されては、自分の立場が無く成る。人といふ者は、然う簡単にイキを引取るものぢやアない。』この人は医科大学の学生なので有つた。

それから、小波は龍造寺の首を切つて、雨後の月に照らして、述懐のセリフに成るので、後見役たる自分は小道具の首を出さうとして、ハツと思つた。それは坊主の首なのだ。鬘を冠せるのが間に合はなかつたのだ。

えんでん鬘で今殺されたばかりの者の首が、倒れると忽ち坊主では、どうにも斯うにも成らぬので有つた。

小波も之には途方に暮れたが、そこは当意即妙で、袖で首を包んで、どうやら見物には分らせなかつた。

大切の『八才子』で、紅葉が紺足袋で出て、途中で気が着いて、脱いだので、悪落の来た話や。小道具の刀が折れて損害を請求されて、大百鬘を冠つたまゝ、その談判の衝に当つたなどは、既に魯庵の『思ひ出す人々』や、自分も他に書き記してあるので、茲には略す。

以上が硯友社劇の第一回で、その二回、三回と、似たり寄たりの滑稽を演じたが、それはあまりに長くなるので、此辺で筆を擱く。

（大正十五年十一月特記）

青空文庫情報

底本：「明治文学遊学案内」筑摩書房
2000（平成12）年8月25日初版第1刷発行
底本の親本：「硯友社と紅葉」改造社
1927（昭和2）年
入力：川山隆
校正：noriko saito
2015年3月31日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

硯友社と文士劇

江見水蔭

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/